

大学教育開発研究シリーズ

NO.6 ● June 2008

学生が見た立教大学の初年次教育

— 今後の充実に向けて —



立教大学

大学教育開発・支援センター

ISSN 1881-1035

学生が見た立教大学の初年次教育

—今後の充実に向けて—

大学教育開発研究シリーズ

No.6

立教大学

はじめに

大学教育開発・支援センターは、初年次教育をテーマの一つとしており、今年度第一回シンポジウム（2007年7月6日実施）でもこれを取り上げ、その内容を「大学教育開発研究シリーズ No.5 立教大学の初年次教育とその展開」として報告しました。

それを受け、2007年度第二回のシンポジウムは、初年次教育に対する全学的な視点の共有のための情報提供と、学部での実践報告という二部構成としました。その際、初年次教育を受けた学生の声を聞き、彼らの報告・感想から、現在展開されている初年次教育を振り返る機会にしたいと考えました。

大学教育開発・支援センターからは、全学的な視点の共有として、これまでセンターが進めてきた初年次教育に関する学内調査、および大学教育全体におけるシステムとプログラムの構造的な構想の必要性と、その構想の一部としての、戦略的な初年次教育の展開について報告しました。そして、それを踏まえて経営学部、理学部の教員と学生から授業について報告をして頂きました。

今回迎えた二人の学生の報告から、講義形式の受身の授業ではなく、自ら調べ、考えたことを他者に発表するという経験が、学生の意欲を喚起するとともに、その中で失敗も成功も強く学生の記憶に刻まれ、その後の学生生活に影響していることが窺えました。

当センターが実施したこれまでの調査で、立教大学では学部・学科、学生支援部局がそれぞれの個性に合わせて初年次教育に取り組み、また充実を図っていることが明らかになりました。今後も、学内で初年次教育への共通認識を進めていき、今後のさらなる充実の糸口を探ることができれば幸いです。

大学教育開発・支援センター センター員／法学部 小川 有美
学術調査員 八木美保子

目 次

はじめに	
プログラム	
開会のことば	1
1. 大学教育開発・支援センターからの報告	3
1-1. 「初年次教育の構成要素—立教大学の初年次教育を考えるために—」	
【檜枝光太郎氏、八木美保子氏】	3
構成要素の作成経緯とその性質	
構成要素表の見方	
大学への適応	
「立教大学」への適応	
専門教育への導入	
スタディ・スキル	
キャリアデザイン	
補習教育	
1-2. 「初年次教育システムを考える—関西国際大学の経験から—」	
【松山 真氏】	11
立教大学は二年目です	
前任校の特徴と立教大学との違い	
各教員の創意工夫を生かしつつ、質を保つことが必要	
GPA の活用方法	
システム整え個人の努力を大きな成果に	
2. 学部からの報告	17
2-1. 「経営学部の基礎演習と BL1」	
【日向野幹也氏】	17
暗くて退屈な基礎演習にはしない	
なぜ“リーダーシップ”?	
グループでのプロジェクト型授業を最重要視	
2年間を振り返って、そして来年度の抱負	

【吉岡聡子氏】	24
今日は失敗を話します	
リーダーシップとは…？	
2人のリーダーと3人のフリーライダー	
イノベーションは違った生き方・意見から生まれる	
失敗を共有することで得られたもの	
2-2. 「理学部化学科 初年次教育科目 化学ゼミナール」	
【大山秀子氏】	29
自ら探究する力を養うはずだった“ゆとり”教育	
化学科でも「自ら探求する力」を-化学ゼミナール概要	
学生からの評価	
Active Learning のススmer聞いただけでは20%、実際に経験して80%	
【柴田幸大氏】	37
化学ゼミナール概要-学生目から見た場合	
先生が知らないことを発表しよう！	
今やっていることが大学院にも続いている	
化学的側面からだけでなく、社会的な側面からも	
3. 意見交換	43
図書館でも様々なプログラムを実施中	
化学ゼミナールの報告を聞いて	
教員との密な連携を進めたい	
図書館は学生支援を強化していきます	
時間割と学生のドロップアウトの関係	
少人数教育に適当な教員と学生の比率は？	
リーダーは交代する？/目指すチームの形は？	
Active Learning/学生の主体性と知的好奇心の喚起/“方法”を学ぶ	
4. 資料	
資料1 : 檜枝光太郎氏・八木美保子氏	52
資料2 : 松山真氏	58
資料3 : 日向野幹也氏	66
資料4 : 大山秀子氏	70
資料5 : 柴田幸大氏	78

学生が見た立教大学の初年次教育

—今後の充実に向けて—

2008年1月8日（火）に行った
シンポジウムの記録

プログラム

〈第一部〉 大学教育開発・支援センターからの報告

「初年次教育の構成要素―立教大学の初年次教育を考えるために―」

檜枝光太郎（ひえだ こうたろう）氏

大学教育開発・支援センター センター長
理学部教授

八木美保子（やぎ みほこ）氏

大学教育開発・支援センター 学術調査員

「初年次教育システムを考える―関西国際大学の経験から―」

松山 真（まつやま まこと）氏

大学教育開発・支援センター員
コミュニティ福祉学部準教授

〈第二部〉 学部からの報告

事例1：「経営学部の基礎演習とBL1」

日向野幹也（ひがの みきなり）氏

経営学部教授

吉岡聡子（よしおか さとこ）氏

経営学部国際経営学科2年

事例2：「理学部化学科 初年次教育科目 化学ゼミナール」

大山秀子（おおやま ひでこ）氏

理学部準教授

柴田幸大（しばた ゆきひろ）氏

理学部化学科1年

〈第三部〉 意見交換

司 会

小川有美（おがわ ありよし）氏

大学教育開発・支援センター員 法学部教授

日 時 2008年1月8日（火）18：15～20：15

場 所 立教大学池袋キャンパス太刀川記念館多目的ホール

開会のことば

小川 本日は、年頭にお集まりいただき、ありがとうございます。

ただいまより、立教大学大学教育開発・支援センター主催シンポジウム、「学生が見た立教大学の初年次教育～今後の充実に向けて」を開催いたします。本年も大学教育開発・支援センターをよろしく願いいたします。

当センターは、檜枝光太郎センター長のもと、2004年秋に発足しまして、3年が過ぎました。いつもアンダーコンストラクション、普請中と思っておりましたけれども、この3年の間に外部の方の知見を吸収し、また内部でもたくさんのユニークな素晴らしい実践があると、内外両面から学んできました。また、それを立教大学全体にお伝えする努力をしてきたと思います。

本日は特に、立教大学の学生諸君をお呼びして、立教大学の初年次教育について大いに語り合おうという趣旨でシンポジウムを行わせていただきます。

本日のシンポジウムは三部構成になっています。第一部として、大学教育開発・支援センターからの報告。檜枝光太郎センター長、学術調査員の八木美保子さん、センター員でコミュニティ福祉学部の教員でいらっしゃる松山真先生にお話をうかがいます。第二部は事例報告1と題して、経営学部の日向野幹也先生、国際経営学科2年の吉岡聡子さんにお話いただきます。7時10分より休憩を挟みまして、7時20分より第二部として事例報告2を予定しております。事例報告2では、理学部の大山秀子先生、化学科1年の柴田幸大さんにお話をいただきます。第三部は19時45分ぐらいから、フロアを交えた意見交換を予定しております。盛りだくさんの内容ではございますけれども、どうぞ積極的に意見交換にもご参加頂き、最後までお付き合いいただければと思います。

1. 大学教育開発・支援センターからの報告

1-1. 「初年次教育の構成要素

—立教大学の初年次教育を考えるために—

檜枝光太郎氏

八木美保子氏

（資料1. P52—P57参照）

檜枝 お集まりくださいまして、どうもありがとうございます。さっそく中身に入りたいと思います。

初年次教育の構成要素を考えるためにということで、私と八木さんでプレゼンテーションをさせていただきます。大学教育開発・支援センターの取り組みとして、初年次教育というのは皆さんご存じのように、高等学校から大学での学習への円滑な移行を図るということで、これは現在ではすべての学生に必要であると私たちは考えています。センターとしては、大変重要なテーマとして取り組んでいます。

本年度、暦で言えば昨年になりますが、7月6日に、「立教大学の初年次教育とその展開—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道—」ということで、シンポジウムを開催いたしました。今日、会場にも置いてありますけれども、こういうかたちで印刷物としてシンポジウムの記録が残されております。実は、これはできたばかりで、皆さんのお手元には今日学内便でお送りしましたので、たぶん郵便ポストに入っているかと思います。会場にも用意してありますので、必要な方はどうぞお持ちください。

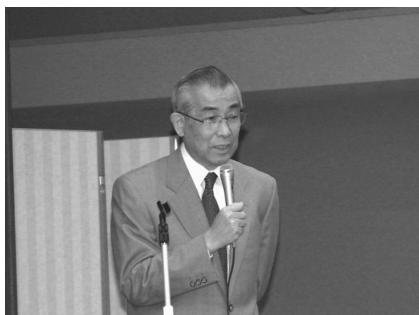
初年次教育というのは、今、大学教育のなかで非常に流行っています。初年次教育の構成要素というものに関しては、世の中一般で言われているものもあるのですが、センターとしては、立教大学の実践を加味して、立教大学における初年次教育を構成する要素をまとめました。その中心になったのが、学術調査員の八木さんですので、これからが中身の話で、それについては八木さんからお話がありますので、どうぞ聞いてください。そして、ぜひこの構成要素というものを、立教大学の初年次教育充実のために活用し

ていただければと思っています。私の話はこれで終わります。

構成要素の作成経緯とその性質

八木 大学教育開発・支援センターで学術調査員をしております八木と申します。よろしくお願いいたします。

お配りいたしました資料の2ページの表をご覧ください。この初年次教育の構成要素ですが、はじめに、初年次教育に関する先行研究の要素分類を参考に作成を開始しました。例えば山田礼子先生や濱名篤先生の研究。あとは最近実施されました国立教育政策研究所の各大学向けのアンケートの分類等も参考にしております。それを踏まえまして、各学部から一年次生に開講され



ている科目について該当事項をご報告いただきました。そして、さらに具体的な内容を知るため、該当科目の担当教員を中心にヒアリングを実施しました。現在のところ、経済学部、理学部、法学部、観光学部、経営学部の何人かの先生方にヒアリングにご協力いただきました。ヒアリング結果を踏まえまして、項目を追

加したり分類の仕方を改訂したりしながら、現在も改訂を重ねている段階です。現段階の暫定版を、本日ご紹介いたします。

今後は、新入生オリエンテーション行事等の正課外のプログラム（単位にはならないけれども、目的を持って意図的に計画・実施されている教育プログラム）、そして、全カリでの開講科目も含めて調査を進め、作成していく予定です。

最終的には、立教大学独自の初年次教育の構成要素を作成いたしまして、一年次生向けの科目や、一年生を教える際に考慮すべき内容等を提示し、学内の教職員の皆さんが初年次教育を構想する際に参考にして頂くことを目的としています。本日は、この後の報告をお聞きになる際の枠組みとして参考にしていただければと思います。よろしくお願いいたします。

構成要素表の見方

それでは、表をご覧ください。グレーになっている部分が大分類です。一番左上の分類とあるところに沿って下に、それぞれ番号が入っておりますが、こちらは小分類です。本日は横の網掛けになっている大分類と、一番左に縦にある小分類の概要を中心にご紹介いたします。

はじめに大分類なのですがすけれども、6種類に分けております。上から、「大学への適応」、二つ目に『立教大学』への適応」、三つ目に「専門教育への導入」です。三つ目の「専門教育への導入」は、学部への適応という面もあるでしょう。つまり、まずは学生が大学という制度や文化に適応できるきっかけをつくる、そして次に、大学の中でも「立教大学」というところに適応できる仕掛けを整備する、そして学部に適応できる環境を整備する、という三段階構造になっています。四つ目は「スタディ・スキル」ということで、大学で学ぶために必要なスキル系をまとめています。五つ目は「キャリアデザイン」、最後が「補習教育」としました。

大学への適応

それでは、大分類ごとにご紹介いたします。まず、「大学への適応」ですが、これは、大学と高校との制度、環境、文化の違いを学生に伝え、大学への円滑な適応を図ることを目指しています。小分類一つ目の「大学生になるという意識づけ」ですが、大学進学率が上昇し、進学することが“当たり前”になってくると、その節目や違いに気づくことそのものが重要になってきます。また、大学に進学が決まればそこで勉強は終わると考えている学生も少なからずいるので、彼らに“そうではない”ことを伝えることも必要でしょう。そこで、そもそも高校と大学は違いますよということを伝える。そして、大学の場合、不特定多数の方がキャンパスに入れるとか、親元を離れて一人暮らしを始める学生がいるとか、高校までとは生活環境がまったく変わりますので、防犯ノウハウも含め、学生たちに伝えるわけです。

次に、大学の特徴として、キャンパスが広く、しかも複数あり、使えるリソースがたくさんありますので、学生のみなさんがそれらを上手に活用できるように、大学施設の紹介とそれらを使えるような支援をすることが必要です。そして、それらのリソースを駆使して、自分から学ぶ意識や習慣づけを

1. 大学教育開発・支援センターからの報告

	分類	内容
I 大学への適応 (高校との制度・環境・文化の違いを知らせ、大学への円滑な適応を図る)		
①	大学生になるという意識づけ (イニシエーション)	高校と大学には違いがあること、大学に入っても勉強は継続すること、自由と責任、自己選択、自己管理(健康管理、防犯ノウハウ)
②	大学施設の使い方	図書館、掲示板、履修手続き、学生相談所、キャリアセンター、診療所等
③	自ら学ぶ意識・習慣づけ	自立的・自主的な学習の促進
④	カリキュラム	大学および学部理念・目的・目標、カリキュラムの構成
⑤	単位制度・履修	①単位制について、卒業要件単位数(必修、選択等の種類) ②WEB登録等、履修制度 ③自己の興味・関心・キャリアを考慮した履修計画、科目選択 ④各種資格取得に必要な単位数*
⑥	成績評価方法	評価基準や評価方法、GPA
⑦	授業のマナー	私語、遅刻・欠席、睡眠、“内職”等の禁止
II 「立教大学」への適応 (「立教大学」の学生であることの自覚と肯定的意識を醸成し、学生が立教大学に“居場所”を作れるような)		
①	立教の学生としてのアイデンティティの形	成立教大学の社会貢献や研究内容、立教大学・学部の歴史、建学の精神、キリスト教理念、他者との共生
②	立教大学への帰属意識・居場所づくり	大学・学部のコミュニティへの参画(居場所づくり)、本意入学感情の克服、上級生との出会い、友人を作れる機会の設定
III 専門教育への導入 (学部の専門教育への関心・意欲を高め、四年間の学修の意義を伝える)		
①	専門を学ぶ意欲・動機付け	専門教育を自己の人生や社会とのつながりの中で意味づけること、専門分野のおもしろさ
②	専門基礎知識	学問領域、使用言語の概念、研究対象・方法、教員の専門領域に応じた専門基礎知識
③	専門で使う方法	各学問領域で学修・研究を進めるために必要な方法(例:経済統計分析、SPSS、フィールドワーク)、日常的に目にする現象を専門的に分析する視点
IV スタディ・スキル (専門分野に関係なく、大学生として身に付けるべきスキルを育成する)		
①	ノートのとり方	高校までと大学の授業でのノートテイクの違い、授業形態や担当教員の授業方法に合わせたノートのとり方、復習に役立つノートのとり方
②	文献の探索	各種データベースの種類と利用方法、検索ワードについて
③	文献の読み方	文献の構成(題名、目次、本文、奥付)、文献の読み方(目次読み、流し読み、精読等)
④	レポート・論文・レジュメの書き方	テーマ設定、情報収集、レジュメ・レポートの形式
⑤	タイムマネジメント	4年間の大学生活、レポート・論文の執筆、試験勉強等、日々の生活のタイムマネジメント
⑥	プレゼンテーションの仕方	資料作成、口調・早さ、立ち居振る舞い
⑦	情報リテラシー	PC、ソフトウェア、Web、電子メール、ネチケット、情報に対する判断力、著作権や剽窃の理解
V キャリアデザイン		
	キャリアデザイン	自己分析、将来設計
VI 補習教育		
	補習教育	大学での学習に必要で、補習が必要な学習内容

方法	該当プログラム
教員・講師による講演やスピーチ、学生に署名をさせる、学部長が新入生全員に個別に声をかける・握手をする	入学式、ウェルカムアワー・ウェルカムキャンプ、キャンパスライフオリエンテーション、授業
教職員によるアナウンス、演習、個別アドバイス、学内探索	図書館ガイダンス、診療所ガイダンス、キャンパスライフオリエンテーション
課題探求型学習、予習・復習の指示、ボランティアや部活・サークル活動等自主活動の支援	授業、ボランティアや部活・サークル活動等
教職員による説明、学部パンフレットやホームページ、履修要項・シラバス、個別アドバイス	履修ガイダンス、授業、アカデミックアドバイザー
教職員や上級生による説明、個別アドバイス	アカデミックアドバイザー、履修ガイダンス、「先輩による履修指南」
教職員による説明、履修要項・シラバス	授業、履修ガイダンス
書面等での伝達、こまめな注意、罰則	入学式、ウェルカムアワー、授業
環境を整備する)	
教職員によるスピーチ、OB/OGによる講演、専任教員の研究紹介、学内探索、パンフレットやホームページ、「立教学院史研究」「立教の創立者 C.M.ウィリアムズの生涯」等文献	入学式、チャペルガイダンス、授業
学生アドバイザー、上級生からのメッセージ、新入生同士のグループワーク	キャンパスライフオリエンテーション、新入生交流プログラム、新入生キャンプ、クラブ・サークル合同説明会、授業
体験学習、教員の研究人生を語る、卒業生や学外関係者の講演	
講義、演習、調査、教員による自作テキストの作成	授業、学部実施の正課外プログラム
講義、演習、調査、実験	授業
教職員によるアナウンス、演習、個別アドバイス	
教職員による講義、演習、調べ学習、図書館探索、推薦図書を紹介	図書館ガイダンス、授業
教職員による講義、演習	授業
教職員による講義、課題、演習	授業
教職員によるアナウンス、演習、個別アドバイス	授業
教職員による講義、演習、個別指導	授業
演習、個別指導、教員による自作テキストの作成	授業
学外者等の講演、授業の中でのアナウンス、キャリアプラン作成	
講義、演習	授業

していくことで学生を主体的な学習者へと育成することができるでしょう。

四つ目のカリキュラムなのですが、高校まではカリキュラムといいますと、文部科学省が定めた基準である学習指導要領がありますが、これは基本的に教員向けにつくられたものですので、教育を受ける側（児童・生徒）は意識せずに勉強していると思います。ですが、大学の場合は、学生が自分で何を学ぶかを選択しなければならない。つまり自分で自分が学ぶカリキュラムを作成しなければなりません。そこで、大学側は提供するプログラムの目的や全体像を伝え、学生が身に付けることが可能な知識や能力、そして四年間の針路をきちんと伝えるというガイダンスを行うことが重要なのです。

五つ目として、それを具体的に選んでいくときに必要となる単位制度ですとか、履修手続きはどのようにするのかというテクニカルな部分がありますので、それも伝える必要があります。そして、単位修得と関係して、六つ目の成績評価方法を挙げました。GPA (Grade Point Average) はもちろん一年次から関係しますので、しっかり伝える必要があります。

七つ目は、私語や遅刻との関連で授業のマナーを入れました。これらは、大学であればどこに進学したとしても理解することが必要な要素でしょう。

「立教大学」への適応

二つ目の大分類は、『立教大学』への適応」としました。立教大学の学生であることの自覚と肯定的意識を醸成し、学生が立教大学に居場所をつくれるような環境を整備するとしております。大学を選ぶときになんとなく選んでいるとか、不本意入学をしてしまっている学生さんが一定程度いて、彼らが意欲的に大学生活を送ることが困難な傾向にあるということは、大学・学部を問わず一般的に聞かれることです。ですので、立教大学が彼ら一人ひとりを大事に教育しようと考えているということを伝え、居場所をつくり、立教大学の学生であること、立教大学で学ぶということを肯定的に認識してもらうことは重要なポイントです。これは学生のみなさんに生き生きと大学生活を送って欲しいという考えとともに、所属する大学に肯定的であることが、アカデミックな成功にもつながるという考えが背景にあります。そこで、特に大学の中でも「立教大学」に適応してもらうことに関するものは第二分類

にしました。

専門教育への導入

三つ目が、専門教育への導入です。こちらは、大学の専門教育への関心、意欲を高め、四年間の学習の意義を伝えるということで、三つ挙げました。「専門を学ぶ意欲・動機づけ」、「専門基礎知識」、「専門で使う方法」という三つの小分類です。立教大学の場合、特に1番の「専門を学ぶ意欲・動機づけ」というところに重点を置いている学部がとても多いという特徴があります。学生さん一人一人に主体的に学んでほしい、意欲的に学んでほしいと考えていらっしゃる先生がとて多いということを感じました。

スタディ・スキル

四つ目がスタディ・スキルです。これは専門分野に関係なく、大学生として身につけるべきスキルの育成をここにまとめて入れました。一つ目が「ノートのとり方」、二つ目が「文献の探索」、三つ目が「文献の読み方」、四つ目が「レポート、論文、レジユメの書き方」、五つ目が「タイムマネジメント」、六つ目が「プレゼンテーションの仕方」、七つ目が「情報リテラシー」です。特に4番目の「レポート、論文、レジユメの書き方」と、6番目の「プレゼンテーションの仕方」に力を入れている学部がとて多かったという印象を持っております。

また、ノートのとり方に関しても、先生方によれば、最近の学生さんはノートをとるのが苦手みたいだとか、「黒板に書いたことを写すのがノートをとることだと思っている学生さんが多いみたいなんだよね」というお話を聞くことが多かったです。それに対しては、先生方が個人でアナウンスをするという対応をされていることが多いようですけれども、組織的に何か教えるという取り組みは見られませんでした。

キャリアデザイン

5番目はキャリアデザインです。学生のキャリア形成において、初年次を実施することが必要な支援を提供するということです。このキャリアデザインが初年次教育において重要な位置付けにあるということは、現在、センタ

1. 大学教育開発・支援センターからの報告

一としても認識しております。このキャリアデザインと関連の深いものが、これまでにありました1から4の分類のなかにも入ってくるかと思えます。ですが、現在、学部でヒアリングをしております、1年次で展開している関連科目は、まだ多くはないということが言えそうです。あとは、立教大学におけるコンセプトですが、現在、コオプ教育インターンシップ協議会を中心に検討中ということもありますので、現段階では具体的な内容についてはふれずに、これも初年次教育に入っているという指摘にとどめたいと思います。

補習教育

最後に、補習教育です。これは高校までの内容で、大学で学習するにあたって、あらかじめ身につけることが必要な内容を提供するということです。複数の学部で展開されており、1年次に展開することが必要であるという認識は、初年次教育に関わっている先生方の中に強くあるようでした。ただし、初年次教育という意味では中核ではないという位置づけにあるというのが動向です。

以上で初年次教育の構成要素の紹介を終わります。この構成要素は、立教大学の初年次教育を組織的に展開していくために利用していただければ幸いです。また、本日のこの後の報告を聞く際に、枠組みとしてぜひ参考にしていただければと思います。ありがとうございました。

1-2. 「初年次教育システムを考える

—関西国際大学の経験から—

松山 真氏

（資料2. P58—P64参照）

立教大学は二年目です

皆さん、こんばんは。コミュニティ福祉学部の松山といいます。私は立教に来てまだ2年目ですので、しかもいつもは新座におりまして、立教大学をそれほど把握している立場ではありません。私はもともと18年ほど病院で働いておりました。病院でいろいろな相談を受けるソーシャルワーカーとして、特に精神科が担当だったので、覚醒剤がやめられないとか、病気で仕事ができなくなったとか、いろいろな相談を受けていました。

そんなときに、現在、関西国際大学で学長を務めておられる濱名先生が突然、私のところに来られまして、「日本にはない新しい大学教育をやりたいので、来ませんか。あなたは非常に変わった人間だと聞いています。私のような変わった教育をするには、変わった人間が必要です」と言われまして、何のゆかりもない神戸に一人で4年間行ってしまいました。そういう変わり者です。

私は学部ができて2年目に行きましたので、学年進行に合わせて次々にプログラムをつくっていくという段階でした。濱名先生ともう一人の先生と、いろいろなことをつくっていきました。もうつくったあとに残っているかどうか分からないというくらい回転の速い大学ですので、そろそろ賞味期限が切れるかもしれませんが、一応簡単にまとめたものを今日出しています。これはそのときにつくったものです。一つ一つ細かいことは言う時間がないので、今日は教育のシステムとしてどのようにつくったのかということをお話ししようかと思います。

前任校の特徴と立教大学との違い

KUINS (Kansai University of International Studies) というのは関西国際大学の略称です。新設大学ですので、教育に責任を持つ大学というのを理

1. 大学教育開発・支援センターからの報告



念として掲げました。面倒見の良さを売り物にしています。これは今、ほとんどの大学が生き残りをかけて面倒見の良さを競っているわけですが、その最先端を追っていたのかもしれませんが。ですから、次々に新しいものを取り入れては、本当に有効かどうかをテストと言っては申し訳ないですが、それも兼

ねながらいろいろなことをやったと思います。

一番中心はGPA制度ですが、それを中心に管理的に運営していくタイプであろうと思います。これはあとでもう少し述べます。

立教でいう1つの学部ぐらいの小規模大学ですので、方針決定にしても徹底にしても、非常に簡単にできるという特徴がありました。私はよく濱名先生に、「タグボートとタンカーのような関係で、うちの大学はタグボートだから、危ないから左というとすぐに左に行けるし、Uターンもできるし、自由自在に動ける。タンカーのように、何人も何人も、「右へ15度」とどんどん伝達して、ようやく右に15度曲がるのに何分もかかるような大きな大学とは違うので、新しいことはどんどんやれる」と言われながらやってきました。

立教はどちらかというタンカー型ですので、同じようにはいかないと思いますし、別の戦略を立てないと、そのまま使えるとはもちろん思っていません。

各教員の創意工夫を生かしつつ、質を保つことが大事

初年次に限らず、教育システム全体としては、4年間の目標や段階というのがあって、その4年のなかで何をするか。その最初のステップが初年次教育だという位置付けです。それから、プログラムをたくさん開発しているのですが、それを支えるシステムが整備されていないと、プログラムの運営がなかなかできないという関係があります。これもあとで説明していきます。

しかし、プログラムとシステムがあればできるかという、そうではなく

て、やはり教育は教員と学生との関係のなかで培われていく、あるいは伝達されていくものだと思いますので、媒介となる教員やプログラムは実際にもどのように使えるのかというあたりが、一番大事なのだらうと思っています。ただ、今日はシステムとプログラムについてお話をしたいと思います。

お配りしたレジュメは、右と左をセットにつくってありますので、画面を見ながら次の資料を見ていただければお分かりになるようにしておきました。まず4年間の学士教育の目標を立てるということですが、この表のように、当時は導入教育と呼んでいましたけれども、4年間の展開教育、発展教育、完成教育があって、それをするためには何が必要なのかということと、入学者の学力に合わせて、次に渡すために何をするかというプログラムの立て方をしています。ですから、入学者がどの程度、何ができるかできないかというのを把握していけないと、基礎演習、学習計画、学習技術、スタディスキルのあたりが立てられないということにならうかと思っています。

次に、講義内容とプログラムで、たくさんありますけれども、ここの部分についてお話ししていこうと思います。KUINSでは研究センター、学習支援センター、高等教育研究所、国際交流センターと、いくつかのセンターがあります。そこでプログラムが開発され、大学のシステムに乗ったかたちで提供されていきます。実際のプログラムや講義がいくつか開発されて、シラバスもつくられ、あるいは教材もそこでつくってこちらに提供するというかたちになっています。このセンター的なものと、各教員が展開しているものとのフィードバックがどのように行われるのか。使い勝手のフィードバックですね。あるいは、学生にとって有効であったのかどうかというあたりで、センターと教員との関係は非常に重要だと思います。

それから、KUINSでは、どちらかというところのセンターがつくって各教員に提供するときに、規模が小さいので、1学年30人ぐらいの教員にこれを徹底すればいいわけですから、FDは強制的な出席になりまして、全員出たうえで教材の提供を受けて、その使い方まで学びます。そのうえで基礎演習、学習計画をそれぞれが担当していくということで、非常に徹底的して管理的に、教員も管理されたうえでこのプログラムを展開するようになっていましたし、どちらかというところトップダウン式に、決められたものを全教員が同じようにやるというように展開していました。

立教に来てみて感じるのは、立教ではその逆で、各教員の創意工夫によっていろいろなプログラムがすでに展開されています。コミュニティ福祉学部でもいろいろ教えていただくと、非常に興味深いことをされています。ですから、今後は逆にそれをどのように位置付けしなおすのかがポイントかと考えています。それを KUINS のように統一する必要はまったくないと思いますし、むしろ個性を生かしたうえで、大学の初年次教育のレベルをどのように育てていくのかがポイントではないかと感じました。

特に必修科目に置いているものについては、学生から見てはずれというものがないように、ある程度の質を保たなければなりません。それを誰がチェックしてどのように直すのかというシステムが、ここにはまだないのかなと感じました。

GPA の活用方法

教育システムの整備に関する部分ですが、さまざまなシステム、特にソフトが多いのですが、ハードとソフトの整備を大学がすることになります。ハードはどここの大学でも力を入れています。特に KUINS では GPA 制度で非常に厳格に行っていました。高 GPA 者への優遇措置をどのように取れるかというシステムです。奨学金の基準にする。あるいは、キャンパス・マイルージという、飛行機のマイルージをまねしたのですが、ポイント制を積み重ねることによっていろいろなものがもらえる。そこに GPA を組み合わせる。あるいは、課題研究という16単位の自由研究を高 GPA 者には許可するなど、いろいろなことをして、GPA を生かすようにしていました。

それはもちろん、次の表にあるように、モチベーションを高めるために使っているわけですね。1番、2番、選考基準とキャンパス・マイルージというようにしています。

低 GPA 者に関してはその逆で、いかに管理をするかということにこれを使っていました。キャップ制という単位制限をして、集中して少ない科目で勉強するようとしています。あるいは個別指導、必ずどこかのゼミに4年間とも必修で入りますので、アドバイザーが徹底的に指導をする。それでも駄目なら学部長面接、それで駄目なら退学勧告と進んでいきます。そのような GPA の使い方をしていきます。

ちなみに立教に来て一番驚いたのは、特に3、4年生科目で学生の掛け捨てが多いということで、登録者に対して出席者が非常に少ない。GPAを実施していると、そういうことはまったく起きずに、一つの科目でD、0点を取るとアベレージは下がりますので、落とせないという状況が出てきます。それに4年間慣れてしまったので、立教に来て本当に、私の授業はつまらないのだろうかと非常にかっかりしました。掛け捨てというのがまだあるのだなと感じました。

もう一つは環境整備です。例えば今言ったGPAを実施しようとする、どうしても出席をきちんと取らなければなりません。大人数の授業でどうやって出席を取るのかというのは、大学のシステムがしないとできないわけです。ですから、電子化して、エクセル形式でアドバイザーのところに全部届くというようにしておかないと、とてもできません。しかもそれが迅速に、1カ月以内にアドバイザーのところに、2回以上欠席した学生に関する情報がすぐに届くということをしていかないと、個別指導には結びつかないので、そういうことのできるようなシステム環境を大学は整えておく必要があると思います。

システム整え個人の努力を大きな成果に

もう一つはFDですけれども、先ほど言ったように、FDは強制になっていましたので、非常に徹底的に教員もそこで教育されて、大学の目標をいかに具現化するかと教えられるわけです。それをしたほうがいいのかどうかというのは、いい面と悪い面があるので難しいと思いますが、いずれにしても大学がそうやってシステムの支えていかないと、個人的な努力を大きな成果に結びつけていくのは難しいだろうと思います。

そういうことで、今言ったようなことをイメージ図にしてみました。いろいろなセンターがあって、この教育開発・支援センターもそうですし、全カリやメディアセンターなど、いろいろなところがあって、どこがつくったプログラムやシステム、あるいは大学がつくったハード環境やソフトといったものに支えられて、教員と学生がいい関係を結び、そこで教育がなされていくという体制がとれば、個々の教員の工夫や努力が非常に生きたものになっていくだろうと感じています。以上です。ありがとうございました。

1. 大学教育開発・支援センターからの報告

小川 タグボートとタンカーというたとえは衝撃的でした。時間が限られておりまして、惜しい気がいたしますけれども、センターの3人のスピーカーから、大学教育という船の全体構造を照らし出し、洗い直すようなお話をいただいたと思います。

2. 学部からの報告

2-1. 「経営学部の基礎演習とBL1」

日向野幹也氏

吉岡 聡子氏

（資料3. P66—P69参照）

【日向野幹也氏】

暗くて退屈な基礎演習にはしない

経営学部の日向野です。よろしくお願ひします。前の方が立教に来られて2年とおっしゃっていましたが、私はその1.5倍でして、3年目です。今はなき都立大学に22年おりまして、新宿方面とのやんごとなき事情で辞めることを決めまして、それからジョブマーケットに出ていたのですが、運良く立教からリーダーシップ教育をやらぬかというお話をいただきました。考えてみると、私は小規模ながら学部のゼミでこの数年ぐらいやろうとしていたこととぴたりだったので、私にとって学問的にはまったく新しい分野だったのですが、思いきってやらせていただくことにして、今に至っています。ですので、これからお話しする内容の一部については、自信たっぷりに言えますけれども、実はここ3年ぐらゐの間に勉強したばかりの内容が半分以上あります。

お話しする内容は、経営学部の1年生にほぼ必修で行っている基礎演習と、BL1という科目の内容です。経営学部は、リーダーシップともう一つ、あちらに責任者がいらっしやる、英語教育の二つがキーワードになっています。リーダーシップのほうを担うのが、全員必修の基礎演習で、リーダーシップを引き続きもっと詳しくというのがBL1から始まるBLP（Business Leadership Program）になっています。

基礎演習の最初の設計のときに想定したゴールは、学部主催の最初の少人数授業です。なので、新設で非常に学生の評判、学生といいますかマーケットの評判が気になる経営学部としては、ここに来てよかったという顧客満足を得たかったわけですね。ちょっと刺激的な言葉づかいですが、対応によ

2. 学部からの報告



ては暗くて退屈で、大学はやはりこうかと思うような基礎演習にしたいかなかったのですね。3番目には、これまたもっと刺激的ですが、古い大学の考え方ですと、学生は前半2年間はあまり差別しないで放っておいて、それでも学問的興味を失わないで生き残った学生だけにエリート的な学問教育をして、プロを養成すれば

ばいいという、自然淘汰の二年間なのであるという考えが、実は昔あったと思います。それを一掃したいとも考えました。4番目は、リーダーシップ開発の糸口にしたいと思ひまして、4番目については、経営学部独自ですので、もう少し詳しくお話しします。

なぜ“リーダーシップ”？

なぜリーダーシップをやることにしたかといいますと、一つには、今、企業でも官庁でも、NPOでもそうですが、環境の激変があるために、何か環境が変化したときに、下で集めた情報を上にあげて、それをもとに上で意志決定して下に伝えてということをしていると、間に合わないことがあまりにも多すぎるのです。そこで、命令系統に従わずに、下のレベルだけで決めて実行してしまうとか、あるいは横でチームを組んで実行してしまうとか、場合によっては斜め下から斜め上にチームを組んで実行するといったような、縦横無尽のチームによるプロジェクトが事実上行われているわけですね。それに対応するには、それにふさわしい権限のないリーダーシップが必要になるわけです。命令してそれに従わせる。上司が命令を出すにはどうしたらいいとか、こうすれば部下はついてくるといったような、本にあるような話ではなくて、まったく対等な立場にある2人、3人、4人、5人、10人の学生のあいだでどういうリーダーシップができるか、できるべきかという話をしたいわけです。それが一番めです。

もう一つは、KYといいますか、最近の若い人たちのなかで、「空気が読めない」というのが排除の言葉になっていますね。「空気が読めないやつ」

と言われると、死刑宣告に等しいことになります。そういう空気のなかでは、リーダーシップをとろうということは、自分をリンチに遭わせるような行動でして、昔に比べてますますリーダーシップがとりづらい環境であると思います。それはちょっとおかしいことなので、せめて昔のレベル、あるいは明治時代のレベルでもいいのですが、そちらに戻したい。あるいは、新しいリーダーシップ観をつくりたいと考えています。

3番目は、学部の経営戦略上のことですが、後発の経営学部ですので、ほかの学部がない、ほかの大学の経営学部がない特色がないと、それこそわれわれもサバイブできないという意識が学部長にはあったらしく、そのころは私はおりませんでした。リーダーシップと英語という二つの基本軸を引いたと聞いています。

そういうわけで、リーダーシップの場合は、ほかの大学にこういう教育がまったくないものですから、私の実感ではゼロからつくっている、暗中模索している感じです。学部長は、この場にはないから言いますけれども、ゼロからつくったといういつもお怒りで、方向性を決めたのはおれだと言っています。

グループでのプロジェクト型授業を最重要視

リーダーシップを養成するために、われわれが基礎演習とBLPでグループで最重要視しているのは、グループでプロジェクト型の授業をすることです。プラス、振り返りがあります。基礎演習の場合は必修ですので、350人。これは1年目の、2006年度の実数ですが、20クラス、60グループをつくりました。20クラスですから、教員も20人なのですね。先生方はすぐお気づきになると思いますが、20クラスで同じ授業をするというのは、非常にむずかしい問題を含んでいます。初年度からプロセスまで含めて、全クラスを均一化するというのは、FDとしては過激であると判断しました。そこでその出口だけ、成果物だけをそろえることにして、プロセスはある程度、教員の採用に任せるという方針をとりました。共通の課題というのは、グループで事業提案、またはグループで書評を作成するという二つのなかから選んでいただきました。書評が入っているのは、語学系の先生方がいらっしやったので、事業提案だけにするとおつらいかなと思ったためですけれども、結局

2. 学部からの報告

は語学系の先生方も喜んで事業提案のほうに合流してくださいました。

去年はポスターセッションで予選を、全60チームやったのですね。私たちのグループはこういう事業をやると、文化祭レベルのものもあったのですが、ポスターを貼って60チーム一挙に採点して、予選を行いました。こう書くと華々しいのですけれども、運営上は大失敗でして、審査員がポスターのところを60個まわっていくわけですね。ですけれども、最初のほうを見ているうちにだんだん時間が押して行って、待っているほうのチームが騒ぎ出しました。騒ぐというのは、べつにプロテストするのではなくて、退屈して騒ぎ出す。そちらのほうに行ったときには、もう私語の嵐で、採点どころではないというように近い状態もありました。あとで申しますように、それは今年については改善しています。

350人が一堂に会せる会場で、予選を通過したチームだけで本選を行って、全教員で採点をしました。この採点方法も実は、私から見ると失敗でして、予選を通過したのがどの先生のクラスというのが出て、それから教員が採点すると、自分のクラスに入れるのはどうかなとやはりお考えになってしまうわけですね。奥ゆかしい先生方ですから。それから、あの先生のクラスばかりに入れるのはどうかなと、非常にポリティカルというか遠慮や配慮のある採点になってしまって、学生のほうも、どうしてあれが上位なのかなということが今ひとつ納得できないようなことが起きました。

そこで、2年目、今年度は欠点を改良しまして、課題をもう少し特定しました。二つプロジェクトをやったのですが、1個目は池袋の活性化です。クライアントも具体的にお願いしまして、豊島区役所になっていただきました。それから同じように、二つ目はヨーグルトの消費促進という、非常に特殊なお題ですけれども、これが日本酪農乳業協会という業界団体をお願いをして、その方に来ていただいて、ヨーグルトの消費をもう少し伸ばしたいから、皆さんの知恵を借りたいと、ちょっと芝居をしていただいて、その答えを数週間後に出させてもらって、そこにまた審査に来ていただくという。豊島区のほうも同じことをしました。臨場感と採点の客観性を目指すために、本選は全部、外部審査員。このクライアントの豊島区役所と日本酪農乳業協会はもちろんですけれども、それ以外に経営コンサルタントの方にも来ていただきました。担当した教員は採点に加わっていません。それが本選です。

予選のほうでも大きな進化がありまして、この年は18クラスですが、18クラスの教員が自分の隣のクラスに行って採点するんですね。隣のクラスと採点をしたものどうしの点数を計算して、予選チームを決めました。ですので、隣のクラスでどういうことをやっていたのかが間接的に分かるという、マイルドなFDをやれたかなと考えています。

事業提案をつくるためのツールというのを、初年度は提供しませんでしたけれども、これを共通教材として配布して、出口だけではなくて、一部のプロセスも均質化を開始しました。ほぼ同じ考え方で、BLPの最初のBL1というのでも、西池袋の住宅地のブランド化というプロジェクトをやりました。豊島区役所は非常に親切でしたので、このときも、続けてお願いしています。

西池袋のプロジェクトのプレゼンテーション風景はあとでお見せします。

1年目のプロジェクト型授業が、細かい失敗はあったのですが、学生にはおおむね好評であったので、2年目に廃止にならずに改良できたのではないかと考えています。それから、1年目の1年生、つまり学部の第一期生、今の2年生ですね。このあとに話す吉岡さんもその一人ですが、優秀だった学生から志願者を募って、下の学年のクラスのSAになってもらいました。これが非常に強力な助けになりまして、すごく手の掛かる授業なのですが、SAと教員でうまく分担できたのではないかと考えています。

このときに、これも細かい工夫なのですが、各教員にはアシスタントであるSAをも教育しているという意識をいただいて、アシスタントに自分のゼミ生を使うといったことがないようにしました。これはべつにパワハラとかアカハラの話ではなくて、あとでもしますが、少人数クラスが何種類もあるメリットを逆に生かそうという配慮です。

2年間を振り返って、そして来年度の抱負

この2年間の成果は、自己評価ですが、新学期の開始前にウェルカムキャンプを行っています。そのときから、最初に申し込んだ基礎演習がスタートしているわけですね。つまり、池袋活性化というプロジェクトは、4月の新学期から始まったのではなくて、その前の泊まり込みのウェルカムキャンプのときから発車しています。誰よりも先にある人がすでに基礎演習のクラスメイトなんですね。グループメイトなのです。学生たちは学部内で最

2. 学部からの報告

初から十分に友達を持てるので、サークルなどに入る必要性はわりあい低いのです。学部のなかで十分友達がいると。それにはダークサイドもありまして、学部のなかに親しい友人が多すぎるので、大教室で私語が多いという副作用もありますが、ブライツサイドはこれです。

2番目は、少人数クラスが多いために、学生がプレゼンテーションに比較的早く慣れるというメリットがあります。

3番目は、当初のねらいそのものなのですが、学生がリーダーシップ体験を早く積める。早く積んだ結果、発展型であるBLP、それから英語の要素が強まってくるBBL (Bilingual Business Leader) で生かせるということです。

4番目は、先ほど申した点ですが、学部授業の中軸に基礎演習、BLP、BBL、専門演習という3、4種類の少人数授業があるために、結果として、2年間たつと、3年間ならますますそうですが、1人の学生を2人以上の教員が少人数教育の環境で見られるというメリットがあります。この例として、例えば吉岡さんは僕のゼミ生でもないし、BLPのコアである経営学科の学生でもない、国際経営学科の学生なんですね。僕のクラスのSAをやったこともないですね。ですけれども、このぐらいには親しい学生が普通にたくさんいるという感じです。

5番目、ここ2年間で、内発的で漸進的なかたちでFDができたのではないかと考えています。

3年目、来年度に向けての改良と課題なのですが、先ほど池袋活性化とヨークルト2本をやったのが、半期では過密なので、もうちょっと減らして、その代わり共通教材をシンプルなかたちで増やそうと考えています。

6番目、ほかの大学の基礎演習で多いと思いますが、活字を読んで長い文章を書く練習というのは、この基礎演習、BLPではかなり不足しています。専門演習は2年の春から始まりますので、そちらに委ねているつもりでいます。

一つ裏話と申しますか、ここでお話しているリーダーシップというのは、権限のないリーダーシップなのです。社会心理学の方は影響力と言うのがお好きなのではないかと思っておりますけれども、influence without authority なんです。学生は、教師が権限のないリーダーシップと言っても信用しない

と思うのですが、BLPの場合は、教員自らが権限のない影響力に日夜苦しんでいるのです。つまり、この20人の教員をなんとか束ねて、ご協力をいただいて基礎演習をやっている。それから、8人のBLPの教員をなんとかしているというのは、私には権限がないのですね。予算もありません。スタッフもない、人事権もありません。けれども、成果は学部長に問われるという、係長さんみたいな立場なのですけれども、でも、それでもなんとかプログラムは動いているよというところを見せること自体も、学生には説得力の一つになっているかなという、自画自賛のような話ですみませんけれども、そういう付録的な面もあります。

先ほどの西池袋の写真ですが、これは経営学部のサイトです。これは松本先生で、BLPの先生ではないのですが、西池袋の先生なので、ちょっと5分間ご登場いただいて、西池袋の住宅地をブランド化するというのは、住民としてどう思うかという感想を述べていただいたりしました。このように、専門科目とか、そうでない方を含めて、学部のなかでの横の連携も目指しているところでは、これはブランドだということで、高岡先生に2分間ぐらい登場いただきました。これは内部の教員です。これは聞いているところです。

この前の優勝者のプレゼンを5分ぐらい。時間がありませんよね注。

小川 では、ちょっと準備に時間を要するかもしれません。経営学部国際経営学科2年の吉岡聡子さんから、プレゼンテーションをお願いいたします。

注 下記のアドレスから、経営学部のプレゼンテーションの様子を見ることができます。
立教大学経営学部ホームページ内「COB Today」

<http://cob.rikkyo.ac.jp/j/COBtoday/archives/01-events/>

【吉岡聡子氏】

今日は失敗を話します

皆さん、こんばんは。経営学部国際経営学科2年の吉岡聡子と申します。今日はこんな目上の人たちの前でしゃべるのでちょっと緊張しているのと、普段こういう場でしゃべり慣れていませんので、多少言葉遣いが荒くなると思いますが、一所懸命お話いたしますので、聞いてください。

今日は、私のBL1での失敗を話そうと思っています。以前の自分でしたら、結構プライドが高い性格ですので、このような人前で自分の失敗をさらけ出して話すことはできなかったと思います。でも、今はその失敗をきちんと生かすことができ、客観視して分析して、今に生かすことができるので、こうやって話すことができます。では聞いてください。

リーダーシップとは…？

今、日向野先生のお話にもありましたが、私は今、リーダーシップというのを勉強しています。皆さんが考えるリーダーシップというのはどのようなもののでしょうか。すぐに思いつくのは、たぶん組織を引っ張っていく人であったり、職場の上司であったり、少し皮肉な考え方をすれば、仕切りたがりの人。あとは自分の意見を押しつけてくる人と考える方もたぶんいらっしゃると思います。さまざまな考えが思い浮かんでくると思いますが、私がこの立教大学に入りたてだったとき、リーダーとは、最初のウェルカムキャンプを通して、グループをぐいぐい引っ張って、グループの方向性を決めていく人と考えていました。

でも、今は違います。今の私が考えるリーダーというものは、自身が所属しているグループや組織のメンバー、班員の特徴をきちんと理解して、そのメンバーの考え、一つ一つの意見を共有しながら、場面に応じて、自分の得意な場面でどんどんグループのリーダーが変わっていくということなんです。つまり、リーダーは一人ではないと今は考えているんです。毎日リーダーが変わっていくのですが、始めは「リーダーは一人」と考えていた私が、「みんながリーダーになれるんだ」と考えるまでに至った失敗を、BLの授業内容に触れながらお話ししていきます。

私はBLの授業で本当にまったくもって同じ失敗を2回繰り返しました。

私のときのBL1は牛乳の消費促進と、デジタル音楽産業に関するプロジェクトの2本を行ったのですが、今回は牛乳プロジェクトの失敗を取り上げてお話しいたします。

2人のリーダーと3人のフリーライダー

牛乳プロジェクトとは、J-MILKさん、日本酪農乳業協会のご協力のものと、牛乳の消費量を増やすにはどうすればよいかというテーマを与えられ、約40グループが新たな事業を提案し、プレゼンで競うものです。1グループ



がほしい5、6人で構成されており、1クラスに6グループ所属しています。先ほど日向野先生のお話にもありましたように、予選でクラスの先生と、また別の先生、二人合わせて私たちの提案を評価してもらって、優秀なものだけが決勝に進み、J-MILKさん、ほかの約300人の学生と先生の前で発表できるんです。

経営学部、そして国際経営学科は、非常にモチベーションが高く、みんながみんな、みんなの前で発表したいとか、J-MILKさんの前で発表したいとか、とにかく決勝に進みたいという気持ちが誰もがすごく強く持っているんです。私ももちろんそのなかの一人だったのですが、お気づきの方もいらっしゃると思いますが、ものをはっきり言う性格なので、配属されたグループのなかでも、自然と私がリーダーになっていったんです。それでプロジェクトを進めていったわけなんですけれども、まずそのプロジェクトを進めるにあたって何をすればいいかと考えたときに、まずは牛乳の消費の実態が今どうであるのかという現状分析をやろうと考えたわけです。ここまでは全然普通ですよ。現状分析をやろうとグループで決まったので、誰々が何を調べてきて、誰々が何を調べてきてと、各メンバーに仕事を割り振りました。それで、予選日、本番から逆算して、いついつまでに調べてきて、いついつにみんなでその調査内容を報告しあおうという日を決めたんです。そのみんな

2. 学部からの報告

た事態が、私のグループは5人構成だったのですが、私ともう一人の男子学生、ここではA君にしますが、私とA君以外のメンバーは調べてきてくれなかったんですね。よくあり得ることで、皆さんも同じような経験をした方もいらっしゃるのではないかと思います。予選日まであと3週間しかなくて、調べることは満載で、現状分析から提案をくみ上げていかなければいけないと考えたときに、でも、それでもほかの3人は調べてきてくれなかったという事態を前に私がとった行動は、その3人がやってこなかったことも自分がやるということだったんです。予選まで時間が無いのならしょうがないと思って、自分が3人の仕事を引き受けたわけですね。3人プラス私の仕事ですから、4人の仕事を私が引き受けたわけなんです。本当にしょうがないなと思っていて、調べてきてくれたA君と私と、調べてこなかった3人の合計5人で話を進めていくのですが、当然、私とA君の話は弾むけれども、ほかの3人はまったく何も知識がないので、私とA君の話にはもうついてこれませんでした。

私とA君で話が進んでいって、ほかの3人は話が全然見えてこない。そこでまたさらに溝というものが深まってきて、3人がだんだん、ミーティング、話し合いに参加しなくなってきて、とうとう呼びかけてもまったく参加しなくなってしまったんです。グループは5人だったのが、実質、私とA君の2人になってしまって、それでプロジェクトを終えてしまいました。これが私の失敗です。非常に暗い話で本当に申し訳ないのですけれども。

イノベーションは違った生き方・意見から生まれる

ここで気が付いたのは、結果として私は提案の結果がよく判断されても、悪く判断されても、3人の何もやらない人、フリーライダーを私自らが生んでしまいました。フリーライダーの発生というのは、もちろんフリーライダー側にも落ち度もあると思うのですけれども、リーダーであった私にすごい落ち度があったなということ、今さらになって気が付いたんです。3人が何もやってこなかった。だからしょうがないと、時間を理由にして、問題を問題として認識しないで、そのままずっと見過ごしてしまったんです。一般的に考えれば、2人よりも5人のほうが仕事の効率はいいですし、5人のほうがそれぞれ違った生き方をしてくる、それぞれ違った意見を持っているの

ですから、一瞬のひらめきにつながりやすい、イノベーションが起こりやすいんです。でも、それにさえ気づかず、やってこないならしょうがないと切り捨てていって、どんどんプロジェクトに取り組んでいってしまいました。

結果として、先ほど提案がいいにしろ悪いにしろと言いましたが、私とA君の2人で取り組んだプロジェクトは、先生に50点さえももらえず、それをはるかに下回る20点か30点の評価を受けました。振り返りの授業を行っているときに気が付いたのですが、もっとメンバー内でお互いの考えを話し合っていて、意見を出し合っていて共有していたら、そこで私が、「時間がなかった、やってこなかったのならしょうがない」ではなくて、「なぜやってこなかったの」ともって聞いて、「これがこうだからやってこなかった」「では、これはやれるよね」と、もっとやってこなかった理由も、追いつめて話させるのではなくて、本当になぜやってこなかったのか、何がやれるのかということで、その3人をプロジェクトのなかに組み込む、プロジェクトのなかに参加させなくてはいけないということに気がついて、リーダーであった私がもっとメンバーに働きかけを十分に行っていたら、それぞれの長所も引き出せて、その長所を生かしていい提案に繋がったのではないかということが、すごく反省になりました。それで、それぞれが得意とする場面でリーダーがどんどん変わって行って、グループがいい方向に進めたのかなと、本当に今さらながら思います。

その失敗を失敗と気が付かなかった私は、次のデジタル音楽産業プロジェクトというなかでも、まったく同じ失敗をしてしまいました。普通に考えて、ドラマや映画のなかでたいがい勝つのは、チーム一丸となったチームなんですけれども、それはドラマとか映画だけの話ではなくて、現実も案外そんなんだなということに気が付きました。

失敗を共有することで得られたもの

以上が私の失敗なんですけれども、ここで皆さんに話したことも全部、授業のなかで話しました。授業のなかで、本人たちを前にしていないのですが、ほかのメンバーを前に、本当にこのように自分がどういう失敗をしたか、なぜフリーライダーが出てしまったのかということも全部話して、ほかの人も同じような失敗を話してくれるんですね。

2. 学部からの報告

そこで失敗を共有するというのもすごく大切で、失敗を共有することで、自分がその失敗を経験しなくても、共有することで経験に近いたちをBLでは得ることができたんですね。それはすごく効率がいいことだと思いました。

その失敗した経験とか、それ以外のいい経験も、今はゼミもありますので、ゼミで得た専門知識をBLのプロジェクトで生かして、BLの失敗の経験をまたゼミで生かすことができる今があります。

短いお話でしたけれども、経営学部が行っているBLPという授業形態とねらいは、私が話したのは分かりにくかったかもしれませんが、日向野先生と私が話したもののようです。私もなるべく自分の経験から、BLがこのように繋がっている、リンクしているということを皆さんに分かっていただきたいくて、本当に言葉遣いが荒くなってしまったのですけれども、少しでもこの授業形態にご理解をいただいたのなら、本当にうれしいです。以上で私の話を終わりにします。ありがとうございました。

小川 ありがとうございました。こちらのセッティングの準備が足りませんで、日向野先生には大変ご迷惑をおかけしました。

学生さんには上下関係を気にしないで、ざっくばらんに紹介してねと言いましたが、実地にそういう教育が行われているというのを実感しました。日向野先生にも吉岡さんにも、失敗を材料にお話いただきまして、成功した話も参考になりますが、やはり失敗した話というのは食いつくように聞いてしまう気がいたしました。

休憩の予定の時間なのですが、先ほどの日向野先生のコンテンツが映せることが分かりましたので、ご休憩に出られる方はご自由に出ていただいて、10分弱、画像のほうをご覧くださいと思います。そのあと第二部の事例報告2に移らせていただきます。

2-2. 「理学部化学科 初年次教育科目 化学ゼミナール」

大山秀子氏
柴田幸大氏

【大山秀子氏】（資料4. P70—P77参照）

自ら探求する力を養うはずだった“ゆとり”教育

皆さん、こんばんは。理学部化学科の大山秀子と申します。よろしくお願
いいたします。

私も松山先生や日向野先生と同じく、立教大学ではニューフェイスとい
いますか、立教に移ってから2年目です。ですからこの授業を受け持つのは、
去年に引き続き2年目ということですので、去年が初めて始まった年度です
ので、新しい初年次教育科目としてご紹介したいと思います。

私の自己紹介になりますけれども、アメリカに15年間おりました、その間、
三つの大学ですっと仕事をしてきました。そのあと国の研究機関に3年強勤
めたあと立教大学に移りました。

そのような経験を踏まえまして、このプレゼンテーションをしたいと思
いますが、今日は理学部から何人もの先生方においていただいておりますが、12
月の教授会で同じ内容をお話させていただきましたので、またお聞かせする
失礼をお許してください。では始めさせていただきます。

最初のところは、お手元の資料にあるのですが、ちょっと皆さんの
プリントではお読みに成れないと思いますが、昨年11月に『毎日新聞』に
載りました、元文部大臣の有馬朗人先生の記事でございます。

有馬先生は、ゆとり教育の提唱者として、どうしてこのゆとり教育を行う
ように提言したかということでお話くださっています。このなかでは、有馬
先生自体が考える力を養う必要性を非常に痛感なさっていらして、「自ら調
べ自ら考える」という、先生ご自身が教育を受けました旧制武蔵高校での理
念に影響を受けて提唱なさったとあります。そして「学習意欲と思考力を養
うのが、ゆとり教育の本来の目的」ということだったので、けれども、「ゆ
とり」という言葉が独り歩きして、その狙いが伝わらなかったとお話しにな
っていらっやいます。



そして次のこのスライドなのですが、NHKの『プロフェッショナル 仕事の流儀』で取りあげられました。ご覧になった方もいらっしゃると思うのですが、京都府立の堀川高校のことを少しお話したいと思います。堀川高校は、府立高校として、大学進学率もなかなかいいところに子どもたちが進めない

ということがあり、生き残りをかけて学校での教育改革を行ったということなのですけれども、その教育改革の成果が、「国公立大合格者30倍のみみつ」という副題も付いて、『奇跡と呼ばれた学校』という本になって、朝日新聞社よりまとめられています。

ここの高校のその教育改革というのは、普通科のほかに、人間探求科と自然探求科というものを開設したということです。人間探求科というのは人文科学系で、自分の興味あるテーマを掘り下げて、3年間学生がまとめて論文を書き、自然探求科は自然科学系でまとめるという学科を設置しています。そして自ら探求する力を養うこと、そして主体的に学ぶように授業を工夫して行っているということです。そして受け取る力、考える力、判断する力、表現する力の4つを強化するという目標を掲げたということです。

化学科でも「自ら探求する力」を一化学ゼミナール概要

そしてこれの趣旨と似たようなことで、理学部の化学科でも化学ゼミナールというものが昨年度より始まりました。これは履修要項のほうから書き出したものなのですが、授業の目標としましては、「化学の学習を行う動機の強化および主体的に課題を達成していく能力を養う」。そして授業の内容ですけれども、化学に関連するテーマを取りあげ、2、3名のグループ、または個人ごとに担当教員と相談しながら、それぞれそのテーマを調べ、最後にグループごとに報告を行うというものです。

人数の関係でもありますが、今年度は授業のスケジュールの位置を5限にしたので、履修者がかなり減ってしまいました。昨年度よりも人数が減って

しまった関係上、グループではなくて、すべてのところでは個人で、学生が一人ずつテーマを選んで、それについて調べて発表するというかたちにしました。

成績の評価、その方法と基準ですけれども、出席状況および授業時の態度が50%、報告会（発表）および提出したリポートの内容が50%というかたちで、これは先生方が何人か組んで公平になるように評価を行っております。

そのほか、調べるための図書館の利用法や文献を検索する方法についてのガイダンスを前もって行うということです。

初年次教育の大学教育開発・支援センターのまとめの要素なのですけれども、まず、今の化学ゼミナールがどの要項に相当するかということ、ここで赤字で示させていただきました。「大学での勉学への導入」というところの欄では、特に自ら学ぶ意識、習慣づけというものを学生に身につけさせるということにもつながると思います。そして専門への導入は、専門基礎知識はもちろん、専門技能、意欲、動機づけ、そしてアカデミックスキルとしましては図書館の利用法、文献の探索、文献の読み方、リポート・論文の書き方など、そして最後にプレゼンテーションを行いますので、プレゼンテーションの方法も学ぶことができます。

そして授業計画ですが、13回ある授業のスケジュールはこのようになっております。まず第1回目はメディアセンターを利用させていただきました、そしてそちらに自然化学系の図書館から、この立教大学の図書館の利用法のオリエンテーションをしていただきました。立教大学の Online Public Access Catalog (OPAC) の検索方法を、実際にパソコンに向き合って、学生にオリエンテーションを行います。

例えば学生が興味あるキーワードを入れて、どのようにしてその資料を探することができるか、実際にできるところまで1回目の授業で行います。

大学にもし資料がないということであれば、例えば学外の資料をどのようにして、また利用することができるかということも教えていただきました。そしてこのときに全体の人数、出席の人数を見て、先生が5人で今年は担当したのですけれども、5人の先生に均等になるように割り当てるということで、学生のグループ分けを行いました。

第2回目からは、それぞれの学生に自分の興味あるテーマを決定してもら

2. 学部からの報告

って、それぞれのテーマに対して調査を行って、毎週、授業のたびに学生がその調べたものを持ってくるのです。その学生に、こういうことがだんだん分かって、こういうふうになってきましたということを授業のときに学生に一人ずつ話させて、そこでその担当の先生と小さなグループでディスカッションを行って、「ではこういうことが、どうしてそうなのだろう」、「例えばこういうふうに分かるとしたらどうかしら」とか、「もう少しこういうところを調べてみたらどうだろうか」とか、そういうかたちでどんどん掘り下げをやっていきます。それをだいたい5回ぐらい行うのですけれども、各グループで、それぞれの先生のやり方で進めます。

最後のほう、後半になってほしいかたちがまとまってきましたら、プレゼンテーションの準備に入ります。プレゼンテーションは、ちょうど化学科1年生の必修科目であります基礎情報化学でパワーポイントの使用法を教えているのです。パワーポイントの使い方を習ったばかりですので、プレゼンテーションの仕方は自由です。例えばパワーポイントを使わなくてもOHCでもいいですと言っても、学生たちは新しく習ったプログラムを使いたくしてしょうがないので、ほとんどの学生がパワーポイントでプレゼンテーションの準備をしました。そして実際の発表会の前の週は、プレゼンテーションの予行練習ということで、各先生が一人ずつ学生のプレゼンテーションの仕方を指導します。

そしてここで言います12回目には、十人ぐらいずつのグループに分かれて複数の先生が入って、学生にプレゼンテーションを行わせました。

それで、今回は人数の関係上、90分授業でやるということでしたので、発表は6分、質問は1分という、たいへん短い時間で物足りない学生も多くはいたと思うのですけれども、授業の関係上、そういうかたちで時間を区切って行いました。

そのときに、原稿は読んではいけない、自分の言葉で話して、自分で理解したことを発表しなさいということで行われました。また発表するだけでなく、聞く側にも質問の仕方として、能動的にディスカッションに加わるということで、質問をした人にはプラス点をあげますということで、プレゼンテーションを行いました。

そして最後、プレゼンテーションのあと、今週だったのですけれども、リ

ポート提出ということで、最後のレポートの評価をまた行います。

具体的に、学生が選んだテーマですが、ここに挙げられましたように、化学に関係する興味ということで、環境問題や材料関係、あとはいろいろな化学技術に関係するものが多いです。

授業風景ですが、これは昨年度も今年度もご担当くださいました望月祐志先生のグループですが、学生が一人ずつ、毎週調べてきたことを発表して、こういうふうになっていますということで、グループで発表しながらみんなでディスカッションして先生のコメントをもらってというかたちの掘り下げを行っているところの写真です。

これはそのだいたいのまとめができたところで、プレゼンテーションの準備に入っているところの写真ですけれども、常盤広明先生のところのグループは、常盤先生の研究室でパワーポイントの準備をしているところです。

これは実際に12月19日に行われたプレゼンテーションですけれども、こうやって学生が一人ずつ前で発表している状況です。

学生からの評価

そして最後のプレゼンテーションの日に、学生に簡単なアンケートをとりました。そのときのことをここにまとめましたので、皆さんにご報告したいと思います。

出席率は毎回ほとんど出ているので、このように高いのですけれども、「履修にあたって十分な準備ができていたか」とか、「授業に積極的に参加した」という項目はかなり高いパーセンテージになっているのですけれども、特に私が感心したのは4つ目の「予習時間に毎週あてた時間」、いわゆる授業時間以外に調べてきて、授業のときにその成果を発表するというかたちです。自分で勉強してこなくてはいけないのです。それがこれのデータで見ますと、だいたい平均で毎週2時間も使って準備してきたという結果が出ています。

そして、「授業の目的が明確であった」とか、ほかには「学問的興味をかき立てられた」とか、「発展的な勉強をした」などがあり、「先生も質問に積極的に答えてくれた」とか、「満足したか」とか、そういうところも高い得点が得られています。

2. 学部からの報告

そしてあと、自由に書いてもらった記述のほうからご紹介いたしますと、授業を履修した理由としまして、「大学に入ってから興味を持てるものを見つけたかった」とか、「発表というものに今から慣れておきたかった」とか、あと嬉しかったのは、この「先輩に勧められて」というものが入っていたのですけれども、昨年度取った学生から勧められたということも書かれていました。

よかった点は、「今まで受けた授業で一番よかったです」、例えば「先生のお部屋でアットホームな雰囲気です」とか、「新しい分野に興味を持てた」、あと「発表の仕方、レポートのまとめ方が習えた」、あと「自分から調べたいという気持ちが生まれた」とか、「ほどよい緊張感があり、みんなまで刺激しあえた」ということも書かれていました。

そして改良してほしい点は、「プレゼン形式が先生によって統一がなかった」、これはパワーポイントを無理に使わなくても、内容のほうが大事だからということで、自由でいいですということで、時間だけは区切ったのですけれども、OHC でやった学生もいたので、そういう意味でこういうコメントがきたのだと思います。この2番目の改良してほしい点が立派だと思うのですが、「発表時間が短いので、せっかく半期をかけて調べてきたのだから、最低でも10分はほしい」とか、「履修した人すべての発表が聞けるといいなと思う」とか、そういう非常に積極的な意見もありました。

あと、授業形態についてですけれども、「少人数でサポートしてくれたのでよかった」とか、「改良点はあると思うが、ぜひとも必修科目にしてほしい」というような意見までありました。

Active Learning のススめ-聞いただけでは20%、実際に体験して80%

今のところが化学ゼミナールの紹介なのですけれども、私が15年、大学関係でアメリカにいたということで、アメリカの学部教育、Undergraduate の教育で、今、何を、どのような教育方法を強調して行っているかということ、最後にお話したいと思います。

私が勤務していたバージニア工科大学の FD プログラムで参加したときのことをちょっと付け加えたいのですけれども、向こうの大学では、今、学部の教育で特に Active Learning という方法を非常に強化しています。これは

学生たちを能動的に授業に参加させ、より深い理解と思考力をはぐくむという方法なのですけれども、学生が飽きてしまうので、基本的には黒板に向かっての授業は15分以上やってはいけないということになっています。いろいろな授業のなかでリズム、教え方を変えて工夫をなささいということなのですが、学生の理解度というのは、ただ読んだだけでは10%、聞いただけでは20%、見ただけでは30%、見たり聞いたりの方で50%、ほかの人と討論して70%、実際に体験して80%、誰かに教えて95%ということで、化学ゼミナールなどのように、自分から能動的に調べて、考えて、まとめていくという、そういう授業というのは、ここのパーセンテージを見ても分かるように、学生にとっても身につく度合いが非常に高いと考えられます。

どうしてこのような教育が今アメリカで行われているかということ、今コンピューターを使ったインターネットなどが進んで、情報がもう周りにあふれているのです。その情報や知識は簡単に入るのですけれども、それをどのように使いこなしていくか。そういうところで、そういう自分から考える力というものが非常に大切であるということを強調して、アメリカの、特に Academy of Sciences が旗振り役になって、20年前からこういう教育にシフトしてきています。それがヨーロッパのほうにも広がっているのですけれども、これは私がアメリカにいるときに、アメリカの教育と日本の教育についてちょっとコメントを書いてくださいと依頼され、日本化学会のメンバーの雑誌に書いた記事です。ちょうどそのとき子どもが小学校だったのですけれども、アメリカの小学校の校長先生に、「どのような教育を目指していますか」とお聞きしたときに、まず第一に Productive、第二に Team Player、第三に Independent Thinker と言われました。

「あなたはどうか考えるの」とか、「例えばこういうことが起きたらどうなるでしょうね」という、そういう質問の仕方をして、子どもたちに絶えず考えさせるという教育を、アメリカは子どものときからやっているのです。

これは大学の教育だけではないのですが、このように、ゆとり教育ではありませんけれども、有馬先生の元の狙いに非常に似ていると思うのですけれども、自分で考える力、先ほどの経営学部のリーダーシップ、そういうことにおいても、自分から考えて、リーダーとしてまとめていく力にも通じる能力だと思うのです。こういうものが非常に重視されて、アメリカのFDプロ

2. 学部からの報告

グラムでさかんに強調されています。

では最後に、そういう授業のやり方ということで、昨日もちょっとアメリカのFDプログラムは、Active Learningはどのようなものかということセンターのほうにお邪魔して、お話をする機会を持ったのですが、化学ゼミナールのような特別な授業形態をとらなくても、普通の授業を一工夫するだけで、学生に能動的に考えさせて、巻き込んで、効率よい教育ができるのではないかなということ、自分ながらどのようにしたらいいかということも含めて考えて授業をやっています。以上です。ありがとうございました。

【柴田幸大氏】（資料5．P78—P79参照）

化学ゼミナール概要—学生目から見た場合

こんにちは。長いあいだいろいろな人のお話を聞いて疲れている方もいると思うのですけれども、何とかあたたかい目で見守ってください。

先生方に何でも話していいと言われてるので、まず率直なことを言うと、大山先生にほとんど全部しゃべられてしまったので、自分にはほとんどしゃべることが残っていません。

大山先生のこのプリントのあとのページに、一応レジュメのようなものをつくってあるので、それを見ながら聞いてください。基本的には化学ゼミナールがどのような授業形態なのかということ、学生目から見たらどうなるのかということをお話していきます。

化学ゼミナールは1年生の後期の授業なので、今年度はもうすでに終わっています。自分たちのグループの場合は、昨日の1時にレポートの締め切りがあったので、そのレポートを先生に出して終了しました。

最初の四角のところに書いてあるのですけれども、1年生のみが受講できるということになっていたので、自分は科目選択の際に「1年生が受講すべき科目である」と考えました。一般の専門科目と違って自分で調べるところを目的としているところで、大学の授業のなかでは大きく異質な授業だと思います。

今回話をすることが決まり、久々にシラバスを見てみたら、「化学の学習を行う動機の強化および主体的に課題を達成していく能力を養う」と書いてありました。ではどういう授業なのかなということで、授業の形態の説明に入ります。少人数で、一応2人から6人と書いてあるのですが、実際先生方はどのクラスも5、6人がいいかなと思っていました。ですが最初は5、6人で割り振ったのですけれども、どんどん学生が履修をやめていってしまいました。

それはなぜかということ、まず最初の図書館ガイダンスが面倒くさかったのです。図書館ガイダンスで、「ああ、こんなに面倒くさい授業なら、取るのをやめてしまおう」ということで、複数の人がやめてしまった。ちなみに「2から」と書いてある、この「2」というのは、大山先生のクラスで、「6」というのが自分たちのクラスです。そうして予定よりも少人数のクラ

2. 学部からの報告



スになったのですが、先生によって授業の進め方が違います。自分の研究室で授業をやる先生もいれば、9号館の会議室のような教室で授業をやる先生もいます。たまに、「ああ、この先生の今日の授業、つまらなかったね」とかいう話を学生同士で話すこともあります。

授業のスケジュールは、先ほど大山先生からお話があったのですが、最初にパソコン室で授業のガイダンスをして、その次から各先生方のところに分かれて授業をやりました。

各先生の授業に分かれた日に、「テーマを決めてきてね」と言われて、2回目にテーマを決めてくるのですが、そのときにはほかの人と合わせる必要がなく、自分でテーマを決めてくればいいので、楽に決められました。

それで、下のほうに矢印があるのですが、そこに自分たちのグループがどんなことを調べたかということを書いておきました。エネルギーや酸性雨、海洋深層水、銀や銅の存在理由、テレビについて、化学物質と環境などについてです。僕は化学物質と環境ということについて調べていました。前に出してもらっているのが発表に使用した資料です。僕は望月先生のグループなのですが、パワーポイントは使いませんでした。なぜかは、よく分らないです。ですが、うちのパソコンにパワーポイントが入っていないので、ワードでやらせてくれて、ラッキーでした。このような感じで、「化学物質と環境」を発表しました。

水銀のことについて調べ、水銀汚染で有名な水俣病について調べました。反応式を調べたりとか、世界ではまだまだ水銀汚染があるのだということを知り、発表しました。

先生が知らないことを発表しよう！

化学ゼミナールの課題と大きく書いてしまったのですが、討論形式かつ出席重視の授業ということで、どちらかという面倒くさいかなと思う学生はたしかに多いと思います。ただ講義を聞いてテストができればいいという授

業と違って、自分の意見を言わなければいけないのですが、今の学生は、どちらかという自分から発信するということが苦手なので面倒くさいと思います。それに、5限ということも少し関係あると思うのですが、途中で履修を中止してしまうという残念な決断をする学生もいました。

それで結局、先生1人に対して学生2人という、すごく贅沢なことになってしまったクラスもありました。ただ、少人数でできるのはとても良いと思うのですが、少人数といっても2人对1人という、先生方がたくさんの若い新しい知恵に触れる機会が減ってしまい、少し残念ではないかなと思います。

良いところは何かと言ったら、なごやかな雰囲気のおかげで勉強できたことです。自分たちのグループの場合は、常に笑いが絶えないし、場合によっては漫才をやっているんじゃないかという雰囲気のとときもあり、授業とは思えないようなタイミングもあったのですが、そういう、普通の授業とはやっぱり違う雰囲気がありました。

自分の調べたいことが好きなように調べられるということも、大きなことです。前期の「化学実験」では、「調べてこい」という課題が出され、その課題をやらないと実験させないと言われました。そう言われたのですが、やらない人はいっぱいいたのです。そうしたら本当に先生は実験をやらせてくれませんでした。

調べるのが大事だということ、先生は強硬手段に出て教えてくれたのだと思います。実験で出される課題の場合、その課題が好きな人と嫌いな人がいて、嫌いな人でもそれはやらなくてはいけないのですが、この「化学ゼミナール」は自分で好きなことを調べられるので、僕としてはどんどん意欲が湧いてきて、色々なことが調べられました。

調べていくなかで、先生から新たな知識も入るし、自分が調べて先生に発表したときに、先生が知らない事実を発表しているときに、先生のリアクションが面白かったので、どんどん先生の知らないことを発表しようと思って、化学ゼミナールの授業を頑張りました。

また、いつも2人から6人のグループの同じ人たちの前で発表するので、このように目上の方々の前で発表するのと違って、とても楽な気持ちでプレゼンテーションすることができます。しかも通算で7回ほどみんなの前で発

2. 学部からの報告

表しているのです、場慣れしているはずです。そのあとで、きちんとした形式でプレゼンテーションできるので、プレゼンテーションの能力は明らかに上がっていると思います。

今やっていることが大学院にも続いている

このプレゼンテーションの前々週ぐらいに、大学院生の発表を一回聞く機会があったので聞きに行きました。発表の形式は、発表時間が10分で質問2分だったのですけれど、その形式が自分たちのプレゼンテーションとまったく同じということに気づいて、やっぱり自分たちの今やっているプレゼンテーションの発展が、大学院生の1年生にまで続いているということを感じたので、やっぱりこれは真剣にやる意味はあるなと思いました。

化学的側面からだけでなく、社会的な側面からも

最後の黒い四角のところの「化学ゼミナールを終えて」というところです。大学の講義と違った視点から、化学を見る機会を得たということです。私は特に水銀汚染を調べたので、化学というだけではなくて、公害という社会的な問題の側面からも化学を見るチャンスを得たので、とても意義が大きかったと思います。

次の、「大学での学び方が分かったかも…」というのは、やっぱり受け身の学習ではいつまでたっても自分に成長はないと思うので、自分で調べる姿勢を持たたということが、化学ゼミナールの良かったところだと思います。

それで、最初にシラバスに掲げてあった目標、「化学の学習を行う動機の強化および主体的に課題を達成していく能力を養う」というものは、私個人的には達成できたかなと思っています。ほかの人はどうだか分からないのですけれど。

だから、この化学ゼミナールという授業は、取っていない人が少ないということが残念だと思います。取っていた人は、必ずしも面倒くさそうにはやっていないし、自分の好きなようにやっていたと思うので、そういう人たちはやっぱり1ランク、2ランク、レベルが上がっていると思います。最後に締めるわけではないのですけれど、初年次教育というなかで、「化学ゼミナール」はいい授業ではないかなと思います。以上です。

小川 アメリカと日本を見渡して、明快なお話をいただきました大山先生、それから理学部の学生とは思えない、落語家のような味わいで話していただいた柴田くん、どうもありがとうございました。

3. 意見交換

図書館でも様々なプログラムを実施中

牛崎 図書館の牛崎と申します。実はコメントペーパーにも書いてしまったので、同じことを申し上げることになるのですが、最初に学術調査員の八木さんから配られた構成要素について、図書館の努力がまだまだできるなと思っているということと、実はやっていることがけっこう書かれていないということに改めて気づかされております。宣伝するわけではないのですが、これは八木さんにご報告して、該当プログラムについて「図書館」という三文字がたくさん入るようにできるなと思います。

化学ゼミナールの報告を聞いて

それから実は先ほど大山先生からご報告いただいた、特に図書館ガイダンスについてです。柴田さんは、「こんなに面倒くさいことをやるのかと」言っていてドロップアウトした学生もいたように思うとおっしゃったのですが、これはたぶん、図書館の担当者として、化学ゼミナール全体の担当教員・代表者との事前の打ち合わせがちょっと不足していたかなという気が、聞いていて少ししました。1年生なので、まず関心を持たせることが重要で、あまりディテールは言わなくとも、概略を図書館ガイダンスでやってほしいと思います。柴田くんには負けるかもしれませんが、学生たちに何とか笑ってもらえるようなメニューを実施し、そこで2回以降の授業にリレーしていけば、きっと、ドロップアウトする学生がもう少し少なくなったのかなと思います。

柴田さんが、とても重要なことを最後におっしゃっていたのですよね。つまり、「自分で調べる」ということをキーワードとして使われていたと思うのです。自分で調べるには、インターネット等で色々調べることももちろん可能ですけれど、ただで使えるわけですから、やっぱり図書館を上手に活用して頂きたい。そのために、図書館が後方支援することができるかなりあるなと感じました。

教員との密な連携を進めたい

ただ、先生方もお忙しくて、なかなか個別的な対応ができないと思うので

3. 意見交換



すが、授業に行く前か、来週の課題を言う前に、ちょっと図書館に寄っていただきたいと思います。つまり、「こういう宿題を出しているから、こんな対応をしてね」と声をかけていただくと図書館も支援ができると思うのです。これはメールでも結構ですので。これについては、われわれ図書館も先生たちに、「いつで

もお気軽におっしゃってください」というメッセージの発信が、ちょっと不足していたという反省もあります。ですから、先生方もどうぞ遠慮なさらずに、図書館のカウンターにいるスタッフ、もしくは事務室にいる整理職員に、学生の初年次教育をサポートしてほしいということ、ぜひおっしゃっていただきたいと思います。もちろん図書館だけではなくて、他の事務部局も、色々なかたちでサポートができると思いますが、やっぱりそういう連携が、もうちょっとあっていいかなと思いました。

教員の皆さんにお願いするだけではなくて、図書館としてももうちょっと、初年次の授業を担当されている先生方に「図書館の人はどういうことができますか」と話しかけていただけるように努力します。最初の図書館ガイダンスだけではないですよ。そのあとにテーマを見つけて、何かを調べていくことになるでしょう。それは場合によってはインターネット情報だったり、新聞・雑誌記事だったりするかもしれません。そういう時々には学生には失敗してもいいから自分でやってみるということ、まずさせてほしい。そういった普段からの意見交換も含め、先生方ともう少し密に連携をとっていきたいと考えています。そうすれば、さらに初年次教育が全体的に学生に伝わっていくのかなという印象を持ちながら、第一部、第二部を拝聴させていただいておりました。

図書館は学生支援を強化していきます

いろいろな機会をお借りして、館長から、図書館は学生への支援をどうやって強化していくかをお知らせしております。取り掛かりとしては、授業内

情報検索講習会をやり、そのあとの常識的なプログラムもやっています。それもやはり教員の皆さんにご理解して頂いてやっていかないと、図書館だけの思い込みでやってしまうと、なかなかうまく次の授業にリレーできませんので、そのへんも今後少し工夫して、大学教育開発・支援センターともご相談しつつやっていきたいなど。また、改めてわれわれがやろうとしつつあることが正しいと、この新年にそんなことを言い切っているのかという気も、ちょっとするのですが、それは強く確信を持ちました。逆に言えば、もっと積極的にわれわれがはたらきかけていいのだということで、非常に励まされたと思っております。

時間割と学生のドロップアウトの関係

大山 図書館の自然化学系の方には、非常に大きな協力をいただいたのですが、今年度、一番ドロップアウトの多かった理由というのが、昨年度は4限に置いたのですが、今年は5限に移したのです。それで、もうその5限にした学生に聞きますと、ほとんどが4限を取っていないということで、そういう意味で、とても時間帯をきちんと選ばないと学生が4時半からの授業には出たくないとか、そういうかたちになってしまうので、来年度はまた前の2時50分からの授業時間に戻しました。来年度はまたそこで少し人数がまた戻ってくるのではないかと期待しています。ですので、学生の取りやすい時間、または忙しい日には入れないということも、こういうふうにノルマがけっこう大きい授業のときには必要なのではないかなと、教員側の配慮として必要なのではないかと、これが今年度の反省点です。

少人数教育に適切な教員と学生の比率は？

藤原 経済学部で藤原と申します。経営学部と化学科では、初年次教育でしかも少人数教育といっても、おそらくやり方が違うと思いますので、それぞれにうかがったほうがいいのかもしいませんが、こういうようなかたちの授業を行うときに、化学科の場合、今年は2人から6人という、言ってみれば教員のやり方次第で何でもできるような人数ですが、こういうようなことを考えるときに、マックスの人数比といましようか、教員と学生との比率ということ考えたときには、どのぐらいだったらこういうかたちで

3. 意見交換

きるなどお考えなのかということ、ちょっとおうかがいしたいと思います。

経済学部の場合には、ずいぶん小さくなりましたが、まだ学生数が非常に多いものですから、ある程度多い学生に対しても、今回の事例のようなかたちでできるかということの可能性を考えたいと思っていますので、人数比についておうかがいしたいと思います。

大山 毎回進展状況を学生に発表させていますので、ある程度の最適な人数があると思うのですが、昨年度の場合、私は9人受け持ちました。9人を1人ずつ、毎回毎回発表させていくのはなかなか大変だったので、それを3人ずつのグループでやったのです。今年は人数がすごく減ったので個人にしたのですが、個人でいい部分とグループでいい部分とがありまして、3人ぐらいのグループにしたときには、1人落ちこぼれがいても、周りからの影響で引っ張り上げられるというような状況がありましたので、ちょうどそのぐらいで三つか四つぐらいのテーマぐらいから、きっと望月先生の6人というのは、なかなかたいへんだったと思うのですが、テーマの数でいいと思いますと、そのぐらいで。一つのグループの大きさも、たぶん4人とか5人になってしまうと、先ほどのお話がありましたように、やる子とやらない子というふうになってしまいますので、せめて3人ぐらいがいいのではないかなという感じがいたします。

テーマ数は五つぐらいでしょうか。それぐらいが適当なのではないかと思います。人数が少なすぎると今度は活気が落ちてしまうので、経験上、化学ゼミナールの場合はそのぐらいが最適だと思いました。

日向野 経営の場合はクラス全体のサイズの問題と、チームリーダーシップですので、グループの人数がどのぐらいになるかということと両方があるのです。入学直後ですとグループ学習やプレゼンに全然慣れていませんので、グループのサイズを小さくしないと、簡単に終わってしまいます。今年の場合ですと、20人のクラスを4つに分割して5人ずつのグループにしました。それはそれでうまく、そう難しくなくできたと思います。BLPの場合はリーダーシップ教育を毎年やることになっている教員ですので、もう少しクラスサイズが大きくて35人ですね。6人グループ、一部5人グループで、5～6個のグループを、常時見回っていることになります。そのときには、このSA (Student Assistant) が不可欠で、できれば2人いてほしいところで

すけれど、最低限1人は必要だという感触です。

たぶん化学ゼミナールと違うのは、テーマが共通で方法が違うという程度の差なのです。ですので、一つのクラスのなかに5つとか6つとかチームがいても、何とかなっているかなという感じですが。発表のさせ合いをしても、ほかの班のことを聞いていることがメリットになるという環境であると思います。

小川 経済学部はいかがですか。

藤原 似たような目的で「基礎演習」というものを行っているのですけれども、この場合は、今年ちょっと大幅に学生が履修してくれたので、少しサイズが大きくなっていますけれども、1クラス20人程度ということでやっています。今回の事例のようにシステムチックにやっているわけではありませんので、一部、共通教科書をつくって、少し共通化しようということでやっています。そのぐらいのということであれば、経営学部のやり方などを少し参考にさせていただいてできるかなと、意を強くしております。

リーダーは交代する？／目指すチームの形は？

菊池 経済学部の菊池進です。総長補佐をやっております。せっかくですので吉岡さんに質問させていただきたいのですけれども、先ほどのプレゼンテーションで、けっこうみんな、しんとしてしまったのですが、これはやっぱり思い当たるのが、いろいろな場面でわれわれ自身にもあるし、それから学部のゼミなどの授業をしている場面でもありまして、やっぱりグループを組んでやってもらうことがあるのですけれども、吉岡さんから見て、リーダーが変わっていくという、これは日向野先生から前に、二度ぐらいおうかがいしていて、同じ表現を吉岡さんからもうかがったので、ちょっとどきとしたのですけれどもリーダーは交代すると考えられているのか。それから二度失敗されたと言いましたけれども、ほかのBL1のチームを見て、吉岡さんの目指すのは、こうあるべきだという経験が、そのチームから感じられたということがあったのか、そのあたりをちょっとお話いただけますか。

吉岡 私とA君のあいだでは、リーダーシップの交換は、本当にちょくちょくありました。私が主に得意とする分野は、どちらかというところ、消費者行動がすごく好きで、消費者行動の部分で私はすごく頑張れるのですけれども、

3. 意見交換

A君の場合は財務要素がすごく強い子だったのです。ですから、財務要素、コストを考えたりすることが彼はとても得意だったので、そのあいだで、リーダーシップの交換はすごくありました。

もう一つの質問をもう一度お願いします。

菊池 ほかのチームのプレゼンテーションなどもご覧になっておられるわけですね。そのなかで5人とか何人かが、みんな連携が取れていると感じられましたか。そこまでいっているチームはけっこうあったのでしょうか。

吉岡 私が見ている限りでは、あったと思います。やっぱり、最終的に最後の本選に残って、さらにJ-MILKさんの前で発表できるチームのほとんどは、5人全員で取り組んでいるところなのです。結局、本選まで1人の力でいけたとしても、そこから先は1人の力では難しいのが現実でして、そこは、同じ立教大学に集まった経営学科の学生といえども、違うところでみんな育ってきて、違うものを見てきているので、そこですごく多様性が生まれているので、最後の決勝まで進んで、さらにまたそこから優秀な作品として選ばれるところは、5人全員の多様性が生きて、それがうまくイノベーション、提案につながっているチームなのだなと、私個人ではそう感じました。

Active Learning／学生の主体性と知的好奇心の喚起／“方法”を学ぶ

小川 では、大野久副センター長から、総括的なお話をうかがいたいと思います。

大野 大学教育開発・支援センターの大野です。日向野先生と大山先生のお話をうかがっていて、学部によってディシプリンがすごく違うので、一概に同じようには考えられないでしょうし、各学部で同じように取り入れられないことがありますので、経営学部と理学部の成功している事例の共通点などを注意しながら聞いてみました。それで、お2人の先生にご確認いただければと思うのですが、この二つの経営学部、理学部の試みで成功しているのは、どうも三つの要素がありそうで、1番はActive Learningは学生に実際にやらせてどちらも成功しています。私のやっている心理学の領域でも、納得、説得、会得の了解過程というものがあるのです。納得しただけではだめで、説明して人を説得できないと会得の段階に至らないので、ですからそれはActive Learningと同じことを言っているなと思いました。

それともう一つは、学生の主体性、知的好奇心を喚起して、好奇心の湧くものに課題を選ばせているという点が共通していると思いました。

それから三つ目に、ここがかなり大きな問題なのですけれど、内容ではなくて学習の仕方を学んでいるのだなということを強く感じました。実はFDをやっていると、私は心理学者なので満足度をはかって、顧客満足度のように上がればいいと思っていたのですけれども、教育学者の方々は達成度を示せと言うのです。4年間でどれだけ成績が上がったか、達成度を示せと。それにすごく違和感があって、達成度を示せと言われると、どうしてもTOEICの点が上がったとか下がったということになってしまうのですけれど、そういう、教育内容の話になっていくと、同じカリキュラムで、みなが同じ内容を学習して、どれだけ点が伸びたかということになって、これは立教大学の自由の学府の理念にも反するのですよね。自由の学府の理念は、それぞれのいいところを見つけて伸ばしていくわけで、一つの型にはめることが目的ではないので、そこを私は今までずっと悩んでいたのですけれど、今日の経営学部、理学部のお話を聞いて、ああ、そうかと思いました。同じ内容の学習をさせるのではなくて、いわゆる学習内容ではなくて、思考の方法や学習の方法を学習させる。心理学でも学習の仕方を学習するという実験があります。今まではそれが頭でつながっていませんでしたが、ああ、やっぱり同じことかなと思いました。

ですから、学習の仕方、ものの考え方などを学んでいくとすれば、他の学部でも、利用可能だろうと思って聞いておりました。

この前の文学部の教授会で、すごく面白かったのですけれども、「文学は教えられないでしょう」という表現をされて、「あ、それはそうだ、感性だからな。だから文学をコンテンツだけで積み上げていっても、文学者にはならないけれど」と思っていたのが、今日少し謎が解けたような気がしました。そういう感性を磨くような学部、学科でも、そのコンテンツにウエートを置かなくて、方法のほうにウエートを置いたようなカリキュラムなりシステムを考えると利用可能かなと感じました。

その三つの点について、Active Learning と主体性と学習の仕方をやっているのだというところについてコメントをそれぞれお願いします。

大山 大野先生、見事にまとめてくださってありがとうございます。先

3. 意見交換

ほどのコンテンツ、内容、または知識ではなくて、その方法を学ぶということで、非常に共通しているのではないかというご指摘なのですが、まさに、知識、魚を与えるのではなくて、魚の捕り方を教える、いわゆるその方法を教えるということが、この普遍的な教育につながるのではないかと私も思っております。

日向野 私のほうも、三つともまったくそのとおりだと思います。特に3番目については、ほとんど同じことプラスさらにもっと考えたことがありまして、それは基礎演習とBL1では、自分たちはリーダーシップにおいて未熟であるということをも自覚してもらう必要がある。それから経営・経済について、まったく無知であるということも自覚してもらう必要があって、それをほかの科目で一生懸命勉強するきっかけにしてほしい。成長していくうちにBL3、4になってくるともう2年生、3年生ですから、成長した自分というのをBLPのなかで、また確認できるというように、ほかの専門科目との相乗効果を最初からデザインしています。そういう意味では、学び方を学ぶのですが、学習のかたちのデザインという側面を狙っております。以上です。

小川 それでは、つたない司会で時間が不十分でしたけれども、そろそろ定刻を過ぎましたので、本日のシンポジウムを終了したいと思います。立教大学のなかでの対話で、これだけ刺激的で豊かなお話し合いができたということは、本当に素晴らしい船ではないかと感じました。そこは変わらないでいてほしいと思います。

本日の記録は、可能でしたらまたパンフレット集にしていきたいと思っております。ぜひコメントペーパーをお渡ししてお帰りいただければと思います。本日はスピーカーの先生方、学生の2人、そしてご参加の皆さま、どうもありがとうございました。以上で終了させていただきます。

4. 資料

大学教育開発研究シリーズ No. 6
学生が見た立教大学の初年次教育
—今後の充実に向けて—

2008年6月発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615
<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/cdshe>
e-mail : cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印刷 精文堂印刷株式会社
〒116-0012 東京都荒川区東尾久1-36-4
TEL : 03-3895-6211 FAX : 03-3892-1544
